

## 戦後 75 年、コロナ感染の中でこそ歴史を問い直すべきだ。

伊藤久雄（認定NPO法人まちぼっと理事）

表題の言葉は、次の論考の結びに書かれていることである。

【視点】沖縄から 琉球大学准教授・山本章子さん（東京新聞 2020 年 5 月 1 日）

戦争とマラリア 感染の歴史を問い直せ

この論考の要旨は以下のとおりである（全文は別紙参照）。

- 戦中、中国や南洋諸島、東南アジア、そして沖縄の八重山諸島では戦闘より感染症（マラリアなど）による死者の方がはるかに多かった。
- 八重山諸島では、日本軍兵士よりもむしろ非戦闘員である住民がマラリアにかかって死んでいった。当時、石垣島や西表島の山岳地帯はマラリア有病地帯として知られていた。ところが日本軍は、マラリア地帯であることを知りながら住民を避難させた。日本軍が住民を避難させたのは、戦争の作戦遂行に住民が邪魔だという発想、住民がスパイになる可能性の危惧、日本軍の食糧の確保などだった。
- 当時の八重山諸島の人口約 3 万人のうち半数超がマラリアにかかり、3647人が亡くなったとされる。波照間島の住民は約 3 分の 1 がマラリアで死亡した。
- 当時、八重山諸島の住民には台湾出身者も数多くいた。マラリアにかかって生きのびた台湾出身者は、「台湾の食文化と食材」に助けられたという。狩猟や採取によって食糧を得ていたことが生存につながったのだ。
- 兵士や八重山の住民を殺したのはマラリアではなく国策である。

太平洋戦争の末期、日本軍兵士が戦闘死よりも病死、餓死が多かったというのは、下記の著作などによってももはや通説である。

- ・ 日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実（中公新書）（日本語）新書 吉田 裕（著）
- ・ 昭和天皇の終戦史（岩波新書）Kindle 版 吉田 裕（著）
- ・ 餓死した英霊たち（ちくま学芸文庫） 藤原彰（著）
- ・ 日本軍と日本兵 米軍報告書は語る（講談社現代新書） 一ノ瀬俊也（著）

なお、日経ビジネス（2019 年 8 月 13 日）に「飢餓、自殺強要、私的制裁—戦闘どころではなかった旧日本軍」という森 永輔氏（日経ビジネス副編集長）による「日本軍兵士」著者の吉田 裕に対するインタビュー記事がある。

<https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00005/080700039/>

しかし、太平洋戦争時に八重山諸島でどのようなことがあったのかについて、恥ずかしくな

がら私はまったく知らなかった。だが、総務省の「国内各都市の戦災の状況」に「竹富町における戦災の状況（沖縄県）」があり、「竹富町における戦災状況」には次のような記載がある。それは「戦争マラリア」についての記載である。

『竹富村民の疎開地は、竹富島玻座間村が西表島慶田城山、仲筋村はホネラに、黒島は西表島南風見、古見、カサ崎、由布島に、波照間島は西表島南風見、由布島に、鳩間島は西表島上原、船浦、伊武田に、新城島は西表島大原、船浮村は大原、祖納、干立に移住した。西表島祖納、網取、崎山や小浜島は、集落近辺の洞窟や畑小屋に避難した。

避難先では簡単な茅葺家屋に、1世帯が2畳ほどに4、5人で暮らした。指定された避難地はマラリアの有病地だったのである。これにより、強制疎開によるマラリアのことを、「戦争マラリア」を呼んでいる。

戦争マラリアの犠牲者は、八重山全体で1万6864人、死者数は3647人で、人口に対する死亡率は21・5%で、5人に1人が亡くなったことになる。山中から自宅に戻っても、マラリア地獄は収まらず、戦後復興の妨げになった。

全戦没者数1317人のうち、963人はマラリアによる死亡者で、その割合は73・2%にも及ぶ。特に波照間島の割合が高いが、それは強制疎開によるものである。』

また、次のような著作もある。

■ 八重山の戦争 太田静男著（南山舎）

砲撃や銃撃等による直接戦争での八重山の死亡者数はおよそ180名ですが、その期間における八重山地方での死亡者数はおよそ3,800名。戦闘以外でどうして人が亡くなるの・・・

■ マラリア撲滅への挑戦者たち 南風原英育著（南山舎）

八重山のマラリア根絶に尽力した防疫監吏・黒島直規氏の半生を描いたドキュメント。マラリア根絶にその一生を捧げた防疫監吏・黒島直規氏の足跡を中心に、八重山のマラリア撲滅に挑戦した人々の軌跡を描いたノンフィクション・ノベル。

山本章子さんの「戦後75年、コロナ感染の中でこそ歴史を問い直すべきだ。」という言葉を噛みしめたい。